「好色に身を任せた世におけるキリスト」

エペソ人への手紙４：１９－２０

April.28.2024

エペソ人への手紙４：１９－２０（パワポ）

Preface

ひと昔前は、世界のポルノ作品の８割以上が日本製だったようですが、現在では全体の６割ほどが日本製だと言われているそうです。

世界一の性産業大国と言われる日本のシェアがその間落ち込んだということは、全世界の性産業が活況を呈し、旺盛な性需要が世界に広がっているということでしょうか。

ところが聖書を見ますと、そのような様相は今に始まったことではなく、最初の人アダムとエバの時代にまで遡ることが書かれており、人が罪人となったその瞬間からもう既に始まっていることが分かります。

先週はエペソ書４：１８の御言葉から、人は、唯一まことの神を認めることが出来ないという根本的な無知、無知の極みに至ってしまったことを見て参りました。

また、無知の極み、根本的な無知とは、神のいのちから遠く離れた状態であることを確認致しました。

そして、今読みましたエペソ４：１９の御言葉には、神の存在を認めないという無知、神のいのちから遠く離れた状態にあらわれる症状が、「無感覚」だと言います。

ここで「無感覚」と訳された言葉の言語的な意味は、恥ずかしさを覚えることを知らず、良心の呵責を覚えるということにおいて鈍くなっているということです。

では、何において無感覚になっているのか？

「好色に身を任せて、あらゆる不潔な行いを貪るようになっています。」

つまり、性的秩序の乱れにおいて、無感覚になっていると言います。

Part One

エペソ人への手紙の送り先である２０００年前のエペソというところには、アルテミスという多数の乳房を持つ女神を祀ったアルテミス神殿という神殿がありました。

私はまだ行ったことがありませんが、今でもトルコに行けば、その遺跡を見ることが出来るようです。

その神殿には、神殿娼婦と言われる女性たちが常に待機しており、その女性たちと性行為を行い、その性行為を行うことによって、女神アルテミスのご利

益を貰えると考えていたようです。
　どこか正しくはない罪悪感のような思いを抱く性的欲望を、自分たち人間の手で作った宗教の宗教心と絡めて、その欲望を正当化するとともに、利益を生む商売やビジネスにまで成り立たせ、宗教的性産業という名の元一大事業にまで仕立てていきました。
　無感覚にも、本来神から与えられた尊い麗しい性を搾取するというサタンの流れに従う社会構造を作り出していました。

　もう文化ですね。
　風習です。
　そういうもんだと思い、思わされ、思わせていました。
　「まあ致し方ないし、皆やっているんだから仕様がないこと」のように大衆に根付いていたようです。
　現代の姿と何ら変わることのない性的秩序の乱れの姿が、そこにはあったわけです。
　使徒パウロは、その間違いを避けることなく、しっかりと指摘しました。
　使徒の働き１９章には、エペソのアルテミス神殿界隈の人たちによるパウロへの大迫害の様子が記録されていますので、家に帰りましたら一度お読みになってみて下さい。

　ここ何週間かに渡って、エペソ書４：１７－１９に至る内容について考えていますが、人が知性において暗くなり、むなしい心で歩み、好色に身を任せるようになったという内容は、先週見ましたローマ書１章の内容とも似ており、むしろローマ書の方が、このことについて詳細に述べているように見えます。

ローマ人への手紙１：２１－２８（パワポ）

　神を神としてあがめず、感謝もせず、その思いは空しくなり、心は鈍くなって物事の本質が見えなくなってしまったにもかかわらず、自分たちは知者だと主張する愚かさが、どこに、どのような形で表れたかと言いますと、神が造られし男と女という性の秩序の乱れに現れたと言います。

　このローマ人への手紙は、使徒パウロがローマに住むクリスチャンたちに向けて書いた手紙ですが、ローマ皇帝の中には、小児性同性愛者だった人もいましたし、ローマにある神殿には神殿娼婦のみならず神殿男娼もいましたので、もしパウロの書いた手紙の言葉が、ローマ皇帝を卑下する内容や大衆を卑しめる内容として伝わって行ったならば、直ぐに掴まり、打ち首獄門となっていてもおかしくない手紙の内容だと思います。
　しかしパウロは、聖書に書かれている神の御言葉に従って、しっかりと、真っすぐに、違うものは違うと、神の造られし秩序に反することは反するんだと語ります。

私はこのローマ書の内容に、殉教も厭わない、「私はキリストとともに十字架につけられ、もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」（ガラテヤ２：１９－２０）という使徒パウロ自身の信仰告白と合致した生き方を生きているパウロ先生の覚悟を決めた潔い姿を見ます。

性の自由を唱える現代においても、もしかすると、同じようなところにクリスチャンたちは置かれているのかもしれません。

Part Two

人は、神から離れ、神から独立したと思いながら無知となり、無感覚となって、結局は、神がお造りになった一人の男と一人の女が肉体的に精神的に霊的に生涯一つとなるという性の秩序を保つことによる幸いよりも、男女が一体となる性的秩序を見失う方向に、刺激にふけるものに代えてしまったことを使徒パウロも、モーセも、聖書も、神さまもお語りになります。

冒頭でも少し触れましたように、このような性的秩序の乱れは今に始まったことではなく、最初の人アダムとエバにまで遡ります。

アダムとエバが、「善悪の知識の木から食べてはならない」と言われた神との約束を、蛇に化けたサタンの誘惑に自らの意思をもってまんまと陥ってしまい、その約束を破り、永遠のいのちを失う罪人となったアダムとエバに表れた罪の症状第一号は性的なものでした。

罪を犯す前までの二人は裸であって、互いに、肉体的にも精神的にも霊的にも隠し合うようなことは何一つなく、互いの裸を見ても恥ずかしいなんてことは一度も思ったことはありませんでしたが、神との約束を破るという最大の罪を犯した直後に彼らに表れた罪の症状は、互いの裸を見て恥ずかしいと思うことでした。

それゆえに、互いの裸を隠すため、互いの生殖器を隠すために、いちじくの葉をつづり合わせて腰の覆いを作り、腰回りを隠しました。

神を見失ってしまったアダムとエバは、互いに、性的なやましさをを心に抱いてしまうようになってしまったわけです。

私たちの社会において服を着るという行為は、人類の歴史を聖書的に遡って行くならば、結局は罪隠しであり、罪人であることを認めたくないという気持ちの表れであるということになります。

その着ている服のカッコよさやトレンドや流行を急き立てながら、比較して優劣を付け、人のカッコよさを示そうとするのは、結局のところ突き詰めていきますと、自らが罪人であるということを認めたくないという罪人なる私たち人間たちの気持ちの表れなんだということになるのでしょう。

創世記に行ってみましょう。

創世記２：１７－３：１２（パワポ）

人類史上最初の歌・音楽は、ラブソングでした。
神によってアダムの体の一部を取り出して造られたエバは、正にアダム自身のような存在であり、二人で一体でした。
アダムにとってエバは、自分自身を愛するかのように愛す唯一無二の尊い存在であり、エバにとってアダムも、自分自身を愛するかのように愛す唯一無二の尊い存在でした。
そして二人は、肉体的にも精神的にも霊的にも一体なんだということを喜びました。

そんな喜びの思いを歌のように告白したのが、２：２３の

創世記２：２３（パワポ）
「これこそ、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。男から取られたのだから。」

という言葉です。
二人は肉体的に一体となる度に、神によって一体とされていることを喜んだわけです。
そこには恥ずかしいなんていう感情は微塵もありません。
他の女性に、他の男性に性的欲求を感じることもありません。
ところが、神との約束を破るという罪を犯した罪人となると、互いの裸が恥ずかしくなり、互いの生殖器をまじまじと太陽の下で自然と見ることも出来ず、いちじくの葉で腰回りを隠します。

さらには、神さまの前で弁明した時、あんなにも美しく麗しい人類史上初の音楽でもあるラブソングを口にしていたアダムは、「この女のせいです！あなたが私に与えて下さったこの女が、私をそそのかしたので、こんなことになってしまいました！」と、神さまばかりかエバにも責任をなすりつけ、エバを責め立て、一体となるという麗しい思いはどこかにすっ飛んで行ってしまい、エバに対する憎しみの感情で、心が、体中が満ち満ちてしまいました。
これが、人類の性的秩序の乱れの始まりです。

この世の中の問題は結局突き詰めていくと、その最小単位は男女になります。
男女間の問題になります。
政治だ、権力だ、富だ、名声だ、愛（恋愛）だと宣ったところで、いつもそれらの問題の根幹になり、土台となり、原点となる最小単位は、男女間の問題です。
現代においても、世界の権力や富の象徴であるどこかの国の元大統領の方も、今、男女間の問題で裁判するという困難の中に置かれています。

聖書は、すべての問題の原点である男女の問題について、一番始めに語ります。
世の中のすべての問題のボタンの掛け違いは、神を排除した男女の問題に起因すると、神の介入を認めようとしない拒んだ男女の問題に起因すると教えてくれます。
聖書は至って真っ当なことを、冷静沈着に一番始めに語ってくれるのです。
伝道者の書９章で語るソロモンの言葉は、物事の核心を突いた偉大な言葉だと思います。

伝道者の書９：９（パワポ）

男女間における平安こそが、人間にとって日の下で与えられる最大の分け前なんだと言います。

Part Three

創世記６章に行きますと、アダムとエバの時代から話が進んだ世界が描かれていますが、その世界は、自らの性的欲求を満たすために、目に映る性的欲望を満たすために、自由に、いや正確に言いますと、秩序なく男女の性的関係が営まれて行ってしまった結果、神さまから、これ以上ない言葉をもって、そんな人間世界に評価が下されています。

創世記６：１－３（パワポ）

ここの御言葉の意味は、神の存在を意識しない。秩序なく性的関係が営まれて行くようになった結果、神の霊が人のうちに留まることが出来なくなってしまったということです。　そして、

創世記６：５－７、１１－１３（パワポ）

こうして起こったのが、そんな世界にあっても神を信じる者として、神とともに歩んだノア以外の人々が、大水によって裁かれるというノアの洪水です。

そして、このノアの洪水は、今私たちの世界がイエス・キリストの再臨とともに、今度は水ではない火と硫黄とをもって綺麗さっぱり滅ぼし尽くされて、新しい天と新しい地が造られる。　ノアの洪水の裁きは、その新しい天と新しい地に入れられることが救いであるということの前兆・前触れでありました。
そうして、最後の裁き、究極的な滅びがあることを忘れないようにと、人類にしるしとして下さったのが、大水の裁きの後に起こった自然現象である虹でした。

創世記９：１１－１７（パワポ）

ノアの洪水以前のこの地上世界には虹はなく、ノアの洪水以後の世界に、神さまはメッセージを込めて空気中の水分に光を反射させて虹をお造りになりました。
私たち人類は、空に浮かんだ虹を見る度に、「ああ、神さまはノアの時代の時のような水による滅びが起こらないようにして下さったけれども、それ以上の滅びがこの後に起こってしまうことを教えて下さっているんだ。その滅びから救われる道があるんだ。その滅びに至らないために用意して下さっているイエス・キリストという道なるお方と歩まなければ！」と思い起こしながら、生きて行かなければならないはずでした。

ところが今、虹は、神がお造りになった男と女という大切な性、男と女という性の一体を乱したことによって堕落し、地上での道を乱し、悪が増大してしまった結果滅びたということと、神の恵みや救いや滅びを意識するためのシンボルではなく、神が最初にお造りになったのではないはずの「性の多様性」というもののシンボルとして用いられています。

私は牧師として、神の御言葉を語らせて頂く者として、ここにサタンの巧妙な置換・置き換えがあると考えております。
このように言うことで批判されたり、バッシングされたり、時代にそぐわないことを言っていると言われたとしても、まあ致し方ないことなのかなあと思っております。
正に、世の終わりを示しいていることなんだと思いますし、終わりの時を生かされているんだと思わずにはいられません。

神抜きの人間賛歌が止むことはなく、人間が作り出した文化という代物が説き勧められることが収まることもなく、神がお造りになった最初の天然世界の秩序や環境の破壊が止むこともなく、進んで行っているのだと思います。
「何でそんな悲観的なことを言うのですか」と思われる方も、もしかしたらいらっしゃるかもしれませんが、この現実を見ずして、今という世界を冷静沈着に聖書の神の視点から判断することは出来ないでしょうし、聖書の御言葉の確実性実現性を読み解き、信頼していくことは出来ないでしょう。

使徒パウロ先生は、このことを避けることなく、正面切って真っすぐに語りました。
創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記を書き残した神の人モーセも、本来あった地の秩序の乱れ、性的秩序の乱れを神から語られ、その語られたことを人々に真っすぐに語りました。

レビ記１８：１－３０（パワポ）

「近親相姦、不倫浮気、妻や夫以外との性的関係、小児性愛、同性同士の性

交渉同性欲、人と動物の間の性的関係獣姦などの神が造られた男と女の一体という性的秩序の乱れに染まってはならないし、それは自然の秩序を乱すことであるがために、結果的に、地・土地があなたがたを吐き出すことに繋がるから、その道ならぬことを行ってはならない」と、神さまはモーセに命じ、命じられたモーセは、神の言葉としてイスラエルの民たちに語りました。

このレビ記の内容は、３５００年前の中東世界における話だけでなく、そのまま現代の世界を映しているかのようなだと思いますし、変わらず、神さまから語り掛けられている言葉です。

Part Four

では、そういう世界に生きる者として、性的秩序の乱れから完全に潔白な人がこの世の中にいるでしょうか？

私たちの中に、好色に身を任せるということにおいて、一点の曇りもない潔白な人がいるでしょうか？

例えばイエス様は、「異性を見て情欲を抱くだけでも、姦淫の罪を犯したことになる」と仰いましたが、「そんなことを心に思ったこともないし、夢に見たことだってない」なんて人が、この世の中に存在するでしょうか？

数か月前の説教で、私の卒業した神学校の牧会学を教えて下さった先生が、授業の中で、ご自分が牧会している教会の聖歌隊の賛美に心を合わせたくて、講壇から聖歌隊の方を見ながら賛美を聞いていると、ある一人の女性が突如として目に入って来て、一瞬にしてその女性と性的関係を持つ映像が頭の中を駆け巡ったという話をして下さったことをお話ししたことを覚えておられるでしょうか。

最初の人間アダムとエバの血筋から生まれてきた生まれながらの肉に属する自然のままの人間誰一人として、もちろん牧師である私自身も含めて、性的誘惑や好色、性的秩序の乱れにおいて潔白な人は存在しません。

このことは、イエス様が２０００年前に接したある一人の女性との出会いの中にも良く表れています。

ヨハネの福音書８：１－１２（パワポ）

イエス様のことをはめようと、また弱い立場にある女性、姦淫の罪を犯してしまった女性を捉え、その女性の人格を踏みにじるかのように利用までして、自分たちの潔白を示そうとしたすべての人たちが、イエス様が投げかけたたった一言に降参して、退散していきました。

「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの人に石を投げなさい。」

すると、年長者たちから始まり、イエス様以外のそこにいたすべての人々がその場を離れて行きました。

イエス様は、私たち人間がアダムとエバの末裔であることをよくご存じで、当然ながら、性的誘惑に弱く、性的罪を犯さずには生きられないこともご存じで、それでも赦し、愛し、励まし、慰め、労わって下さいます。
一方で、厳しいかもしれませんが、ちゃんとしっかりと、あるべきことを言葉をもって語り掛けて下さり、罪との戦いを止めてはいけないことも教えて下さいました。
「わたしもあなたにさばきを下さない。行きなさい。これからは、決して罪を犯してはなりません。」

「決して罪を犯してはなりません」という言葉は、私たちには決して守れない、私たちを罪に定めるような厳しい言葉のように聞こえてしまうかもしれませんが、その真意は、「なお罪人であることを忘れず、罪人であることを認識しながら、父なる神に、わたしにその罪を告白しつつ、神によって、聖霊によって変えられていくことを決して諦めないで、主イエスという道を、主イエスとともに歩んで行きなさい。ともに歩んで行こうではありませんか」という慰め、励まし、赦し、力添えです。

さらにもう一つ大事なことを語り掛けて下さいました。
それは、「わたしもあなたにさばきを下さない」という言葉です。

イエス様が「さばきを下さない」と仰るのに、恐れ多くも敢えて、誰が他の人を罪に定めることが出来るでしょうか？
私たち人間は、母の胎に宿った時から生まれながらの神の御怒りを受けるべき子らであるがために、誰もが本能的に、性的罪に対して罪悪感を感じ持っています。
それゆえに、自らの潔白を主張したいという思いに駆られ、自分のことは棚に上げて、何よりも人の性的罪に対して敏感にさばきを下したくなる偽善性を持ち合わせています。
この事実を遜って、しっかりと意識しないならば、バッサバッサと人をイエス様の言葉に反して、罪に定めるような高慢、傲慢を働いてしまうことになるでしょう。
「自分は正しいんだ」と上ずっていることにも、気付かなくなってしまうでしょう。

ですから、ソロモンの言った、「あなたがたは正しすぎてもならないし、悪すぎてもいけない。この地上に正しい人は一人もいない」という言葉を肝に銘じる必要があると思います。

かつて神さまは、旧約聖書を見ますと、怠惰で傲慢な性的欲望に自らの意思で絡み取られて行き、人を騙し、権力を悪用しながら、尊い部下のいのちまで殺めたダビデをお許しになり、愛して下さいました。

もちろん、ダビデの正直な告白と真摯な悔い改めがありましたが、悔い改める以前のダビデを切り捨てなさるようなことは決してなさいませんでした。
ソドムとゴモラもそうです。
彼らをむやみやたらと滅ぼすような事などせず、まず彼らに神様は語り掛けて下さいました。

好色に身を任せたあらゆる不潔な行いを貪るような世にあって、キリストは、イエス・キリストは、愛情を持って、赦し心を持って、接して下さいました。
もちろん、罪をうやむやにするのではなく、罪は罪として認めることが第一で、その先の赦し、抱擁、受容までしっかりと示して下さったわけです。
これが、今日の御言葉、エペソ４：１９－２０の

エペソ人への手紙４：１９－２０（パワポ）

という言葉の意味するところではないだろうかと思うのです。

Conclusion

私たちは皆、性的罪に弱い者たちであります。
だからと言って、性的罪に身を任せて良いということでもありませんし、それと同時に、他者の性的罪をむやみやたらにさばくことも、主イエス様の姿に倣ったものだとは言えないでしょう。

だから、私たちは祈るのです。
祈って、御言葉を食べて、神様の御旨を求め、主の御旨に従って悔い改め、主の御旨に従って人に接し、この世界をキリスト者として生き抜くことが出来るよう神に求めるのです。
神と向き合うのです。
愛を施された者として愛をもって生きようと、厳しくも優しい愛を持って生きられるよう祈るのです。

混沌とした世界に生きていることは、間違いのない事実だと思います。
では、その混沌とした世界の中で、聖書の言う知性をもって、光に照らされ、神のいのちに留まる生き方が何なのかを御言葉から教えられ、聖霊に示されて生きられるよう祈るのです。

お祈りいたします。
祝祷：エペソ人への手紙４：１９－２０